

博士学位請求論文概要

History Unhinged: World War II and the Reshaping of Indonesian History [繋がらなかった歴史: 第2次世界大戦と再形成するインドネシア史]

William Bradley Horton
[ウィリアム・ブラッドリー・ホートン]

歴史研究では、政治体制の変化で時間軸を「分断」する傾向があり、現代史の中で第二次世界大戦は、しばしば歴史の流れから「分断」し、「孤立した」一塊の時期として捉えられる。政治体制による時代の「分断」は、東南アジア現代史に関しても同様であり、インドネシアの近現代史では、①植民地時代、②第二次世界大戦期/日本占領期、③独立以降と、概ね3つに区分される。植民地時代研究であれば、1942年までで終わり、インドネシア独立あるいは独立以降の研究であれば、1945年から始まるのが通例となっている。東南アジア現代史における戦時期の「分断」は、このような政治的な側面のみならず、歴史研究における「研究の道具」としての多言語使用という難しさからも、「分断」、「孤立した」状況を創り出している。それは、第二次世界大戦が、欧米列強の植民地時代と日本占領期の重なりあった時期ということに起因する。太平洋戦争というより第二次世界大戦という言葉自体が語っているように、日本とアジアという構図のみならず、旧宗主国である欧米が、常に関わってくる時代であり、多言語的にわたる史資料を、読み解くことの難しさを、孕んでいるからである。特に、主たる文書が日本語であるという技術面からも、この時代は国外の研究者にとって、歴史研究の基礎とされてきた文書主義に徹することの困難さを内包しており、日本占領期研究は昨今特に嫌忌され、歴史研究者は、あえてその時代を「分断」し、研究対象から外すか、最小限にかかわるといった研究アプローチを採用したため、歴史から「欠落した」時期となってしまったと言っても過言ではない。

ふたたびインドネシア現代史に目を移すと、第二次世界大戦期は、植民地時代の研究に必要なオランダ語とインドネシア語に加え、日本語および英語も必要になる。日本語が必須なため、欧米やインドネシアの研究者は、日本語資料を限定的に使用するか、一部の翻訳資料に依拠するばかりである。そして同様な問題はオランダ語を扱う日本人研究者にもあてはまり、結果、言語環境ごとで研究は独自の発展を遂げ、研究自体の広がりさえも失われている。加えて、『オリエンタリズム』ですでにエドワード・サイードが指摘したように、「アカデミックの形式」の問題も指摘することができる。つまり、一般的な学術研究の常である、先行研究調査とその分析は、研究者の思考を否応なしに先人の研究へいざなう呪縛となる傾向があるということである。このことは、類似の資料を使用する傾向にある日本占領期インドネシア研究では、とりわけ顕著であり、固定する思考の方向性と、史資料の類似性から、多様なアプローチの萌芽を阻害する傾向さえ見いだせる。さらに、言語に起因する文書研究の困難は、終戦直後、証拠隠滅のため日本軍が、戦争に関するすべての資料を燃やしたという「焼失神話」によって弁明され、多くの研究者は史資料発掘の試みさえも諦め、史資料が現存していないという言説と共に、アプリアリ、ステレオタイプと仮説、あるいは現在の政治的記憶があたかも「史実」として歴史は綴られ続けている。

本博士学位請求論文は、インドネシア現代史研究で、多くの歴史研究者が「避けて」きた、あるいは「最小限に抑えて」きた日本占領期に焦点をあて、日本占領期を分断された歴史の接

合期として、積極的にインドネシア現代史に取り込むことで、新たな視座と異なる視点でインドネシア現代史を見直し、再形成することを目的としている。日本占領期インドネシアを積極的に取り込む手法としては、まずオランダ植民地時代の終焉期であり日本占領期の始まりである 1942 年、日本占領期の終焉でインドネシア独立戦争期の始まりである 1945 年といった、歴史教科書的な時代区分とその区分から生まれる「分断」された時代に基づく社会観を排除し、インドネシアの歴史を植民地時代から連続した一連の時間軸として理解していくことを手始めとする。日本占領期を、インドネシア現代史における、歴史研究の「欠落した」時代と捉えるのではなく、接合期と捉え直し、本質的に、日本占領期と関連深い要素を研究対象として光を当て、第二次世界大戦中を起点に、戦前、戦後の連続性・変容を見出すことができる。特に、本論文では、関連深い本質として、「政治と文学というアプリアリ」(第 2 章)、「政治化されるモニュメント」(第 3 章)、「第二次世界大戦のステレオタイプ」(第 4 章)、「非歴史が作る戦争の記憶」(第 5 章)という異なる要素を扱っている。各章の概要は以下のとおりである。

第 2 章 Changing the course of political and literary history: Perceiving the reappearance of a politically active literature [変化する政治・文学の流れ：政治文学の理解]

三年半にわたる日本占領期は、文化や文学活動の停止期あるいは停滞期と認識されているが、当時の史資料を精査すると、植民地後期には無名であったはずの作家の活躍がみられたり、出版や発表媒体の変化がみられるといった、活動の性質の変化はあるが、決して停止期ではないことが判る。本章では、日本占領期に政治活動家として重要な役割を果たしていたが、インドネシア現代史の表舞台から姿を消した、オランダ植民地時代後期の政治活動家、アブドゥルカリム・エム・エス (Abdoel'lxarim M.s) と、正統派文学作品の作者という評価を得ることはなかったが、流行小説や短編で一躍有名になった作家兼出版社主タマル・ジャヤ (Tamar Djaja) という、二人のインドネシア作家の日本占領期の活動を詳らかにする。また、ほか複数の作家の植民地時代政治活動にも焦点をあて、戦前から戦後の活動を検証する。特に、1930 年代後半から 1940 年代前半の発表作品を精査し、彼らが現代インドネシア史の中から忘れ去られたり、偏った評価で語り継がれたりした理由を解明する。

それぞれの作家や活動家の略歴を紹介すると、アブドゥルカリム・エム・エスは、1910 年代から 1920 年代に急進的左翼運動に参加した活動家であった。オランダ植民地政府に捕まり、1920 年代後期まで、オランダ東インドの流刑地として最も過酷なボーヴェン・ディーグル (Bovel Digoel) へ送られた。釈放後から 1930 年代をつうじて、民族運動に参加することはなかったが、日本軍のオランダ領東インド攻略を機に、オランダの抑圧から解放され、日本占領下の 1943 年から 45 年の終わりまで、スマトラ島の最大都市メダンで、大衆や急進的若者への影響力を持つ最も重要な民族主義者として名を馳せた。戦前、オランダ植民地政府から迫害を受けるほど、政治活動にのめり込み、日本占領期もその活動に衰えを見せなかったアブドゥルカリムだが、戦後のインドネシア現代史には、左翼活動家、民族主義者として彼の名前は見当たらない。歴史の隙間を紐解くと、1930 年代アブドゥルカリムが、政治活動に参加していないことに、違和感を覚えるが、当時のメダンの社会状況を地方史から読み解くとオランダ植民地政府の言論弾圧政策で、アブドゥルカリムが釈放時政治活動を禁止されたことが判る。さらに、政治活動禁止時期の彼の著書を精査すると、その語りの中に隠喩や示唆的表現を用いることで、文学作品を通じて政治批判を続けていたことが見いだせる。この「表立った」政治活動に関わらなかった、アブドゥルカリムの文学を通しての政治活動の発掘は、蘭領時代の 1920 年代と日本占領期の彼の変わらぬ政治活動から、見いだされた歴史の連続性といえる。

アブドゥルカリームの、空白の時間をその前後の時代から推量し、再検討するという試みに倣いながら、第2の例として、フィクション作品を中心とした作家兼出版社主のタマル・ジャヤ（Tamar Djaja）に光をあて、オランダ植民地後期であり日本占領期前数年間の、スマトラにおける出版事情を検討する。執筆活動や出版物を政治活動として位置付けるか、あるいは単なるビジネスとして位置付けるか考察する。ここでは西スマトラフィクション作品を扱う出版社主兼作家タマル・ジャヤの言論から、政治活動のようなビジネスと異なる動機づけと出版活動との関係を検討する。タマル・ジャヤが編集長として発刊したシリーズ物の検証であるが、彼が執筆した小説の中で、編集者として、ビジネスマンとしての役割があることを吐露していることから、当時の出版活動が、政治あるいは思想活動のためだったという考えを一蹴してしまう。しかしながら、このようなビジネスマンの顔を持つタマル・ジャヤも、自らの著書や出版物に社会的責任を持っていないような同僚に対しては、厳しい意見を持っていたことも、当時の出版活動が単純に一つの目的や動機からなるものではないことが理解できる。詳細な研究によって、当時出版が、言論活動の道具であると同時に資本主義の道具であることを、理解することができる。最後の例として、政治活動に積極的だった数名の作家に焦点をあて、彼らの戦前・戦中・戦後の活動を簡単に紹介する。当時の活動家が、決して一つの行動パターンを持っていたのではなく、その活動は多岐に及んでいた。活発な政治活動をしている個々人は、オランダ植民地時代最終年の頃になると、言論弾圧を回避するため、盛んにフィクションを執筆している。このことは、周知の史実であったが、戦後のインドネシアでは、既に忘れ去れた歴史の一部になってしまった。

第3章 “Political” Histories: Filling in the gaps of histories

〔異なる「政治的」歴史：それぞれの歴史の溝を埋める〕

1721年、謀反の罪でオランダに処刑された欧亜人がいた。1888年初頭になると、この歴史上の人物に関して、マレー/インドネシア語で出版された。本章では、この歴史上の人物に焦点を当て、19世紀後半に記述されていたナラティブを研究し、歴史上の人物が、インドネシア人にどのように理解されているか、また、どのような理解をしていたのかを考察する。

北ジャカルタに、その地域で長きにわたり語り継がれたであろう、歴史上の人物—ピーター・エルベルフェルト（Pieter Erbeveld）—の頭蓋骨を、石膏で固め壁の上に突き刺したモニュメントがあった。「破かれた皮膚の王子」として有名なモニュメントであったが、1942年日本軍がジャカルタに入城すると間もなく、オランダ植民地時代の権威の痕跡を排除するため、日本軍によって取り壊された。日本軍部は、1942～43年ジャワで当局が刊行した出版物に、敬意を表し日の丸で覆った頭蓋骨と一体になっているモニュメントの写真を、短い歴史的背景と解説をつけ掲載した。日本軍によって破壊したにもかかわらず、占領期に仰々しい儀式を執り行ったのは、エルベルフェルトに関する世間の理解を考慮してのことであった。モニュメントは、1970～80年代に、同じ場所にレプリカとして建立されたが、モニュメントが建立、破壊、再建が行われたことを鑑み、標準的な時代区分を退けることの重要性を示唆している。

モニュメントに関する最初の出版から112年の間、印刷出版物のみが、エルベルフェルトに関する人々の理解を知る手掛かりとなっている。また、印刷出版物という大量生産のテキストの普及により、人々の知識に影響を与えてきた可能性は高い。この歴史的人物に関する物語を、最初にオランダ語で発行することに踏み切ったのは1840年代であるが、この1840年版の物語は、1888年および1924年版の物語の基となっている。1924年版は、インドネシアの華人ティオ・イエ・スイ（Tio Ie Soei）によって著され、1960年代と1970年代、新聞に掲載された

エルベルフェルトの歴史の「原著」であった。また、1970年代と1980年代のインドネシア政府の歴史刊行物の記述と、その時期制作されたテレビドラマは、間違えや変更はあるものの、やはり1924年版を基にしている。

18世紀初期から続いている、この「然して」重要でない人物だったはずの、エルベルフェルトに関わる語りは、彼の話に対する作者や製作者の闘争や、モニュメントに纏わる紆余曲折といったことの「経験」が、この「歴史的人物」を政治の舞台で重用できる重要な人物に変えていったことが明確になった。第二次世界大戦中におこった、モニュメントの破壊や日本占領期の出版という、エルベルフェルトに纏わる出来事がなかったら、彼は忘れ去られていたかもしれない。そうでなくとも、モニュメントの再建を検討するようなことには、なっていないかただらう。

第4章 World War II: Imagining the Unimaginable

〔第二次世界大戦：想像不可能な想像〕

戦時期の文書研究が欠如している原因としては、植民地時代あるいは独立戦争期の歴史家が、それぞれの研究の周縁の記述として、数限られた戦時下の史資料を基礎とした「紋切り型」の日本占領期インドネシア史が流布し、戦時期のことを既に「理解している」と思い込んでいるからである。第4章では、戦時中の史資料を体系的に検証することを怠ったにもかかわらず書かれた、歴史研究から逸脱した歴史について精査していく。まず、日本占領期インドネシアにいた日本人女性についての研究である。一般的に、日本軍は100%男性であることから、日本人女性は戦場に現れないと考えられがちである。そして、日本人女性がいなかったことが、現地女性に対して日本軍が蛮行をはたらく要因ともなっているとも考えられている。しかしながら、戦時中、女性たちは日本国内にとどまっていたばかりではなく、多種多様な目的を持ち戦地へ赴いていた。林芙美子のような、有名な女流作家も、1942～43年に、インドネシアへ赴き、現地の日本人やインドネシア人と個人的に接触を持ったし、出版物を通じて報道もされた。当時の新聞、雑誌といった出版物を悉皆調査すると、日本占領期インドネシアには、多数の女性がタイピストや事務員、先生や看護婦といった職業に従事し、また通訳や料理人、その他の職種で働いていたことがわかる。このことから、一般の歴史理解と当時のインドネシア日本人社会には、ズレがあることが見いださせる。

次に、戦時中に出版していたため、後に「宣伝物」として過小評価されたインドネシアの小説—Roman-Pantjaroba Palawija（畑の穀物：転換の小説）—に焦点をあてる。1945年に発行された美しい小説は、インドネシア社会に内在する人種間の緊張関係や暴力を懸念し、社会協調のための希望を表現している。この小説を検証すると、1945年代の民族主義的語りとは異なり、政治性は見えない。民族主義運動が再隆盛する日本占領期末の独立戦争への移行時期、文筆活動では、政治的なものが主流になり、政治性のない小説は周縁におかれた。周縁におかれたが故に、記憶が薄れ、この時代の作品として忘れ去られてしまった。

最後に、短い記述ではあるが、戦争中の「国際結婚」とそれに伴う国籍の問題について触れる。終戦直後の「引き揚げ」に関する事例であるが、日本占領期インドネシアで、日本人男性と関係を持った印欧人あるいは欧州人女性が、1946～47年の引き揚げに際し、祖国ではなく日本に「戻る」ことを選んだ例である。ここから見えてくるのは、人種や国籍の区分に対する日本とオランダの違いであり、オランダは日本より明確に、人種や国籍の「法的」区分を敷い

ている。国ごとの法的や認識の違いにより、戦後引き揚げの際の、引き揚げ先決定に際し、種々の問題があったことを紹介した。

第5章 Re-historicizing Postwar Memories of the War 〔戦争に対する戦後の記憶を再び歴史化する〕

本博士学位請求論文の最後の章として、いかに戦後の戦争に関する歴史言説が、根本的に戦後政治や思想によって形づけられた非歴史的なものであるかということを詳らかにする。思想や政治に依拠した非歴史的な歴史言説は、戦時中の文脈で綿密に資料分析をすることと、戦争中の記憶を形作ったと思われる、戦後の社会、文化そして政治の歴史を、丁寧に読み直すことで、戦時期の社会表象を再形成することができる。本章最初の焦点は、慰安婦についてである。1991年頃から、第二次世界大戦に関する歴史のなかで、国民対立の中心である。慰安婦は、戦争中、日本軍が許可した施設で、日本兵に性的サービスを提供する女性であった。第1節では、第2次世界大戦前の日本、オランダ、そしてインドネシアの売買春にかんする法整備を詳らかにする。日本は売買春婦に対して、また軍に対する性的なサービスに関して、国家の管理・介入が強力になっていく方向に動き、インドネシアでは、オランダ植民地政府が19世紀のオランダが施行していた軍管理の「公娼」制に類似している日本の実践とは異なる方向へ進んでいた。オランダは、直接管理・介入するのではなく売買春を認めるが抑圧していた。売買春婦は、それを生業にすることはできたが、関係者が売買春婦から貸座敷料や仲介料といった利益を得ることは禁止した。また国家が性病抑止に関わることもできなくなっていた。このような社会や法律の発展におけるそれぞれの政策や法整備の結果、大戦中、慰安婦のみならず異なる問題が表れてきたのである。次の研究は、2000年に、満を持して出版された、1970年代のインドネシアのブル島にいた政治犯に関する調査結果についてである。この調査結果には、1970年代、元慰安婦について記述したのがあり、政治犯たちの元慰安婦に対する理解は、日本の犠牲者というより、戦後のインドネシア社会の犠牲者という捉え方であった。しかしながら、1990年代になって編者たちが、そのナラティブを反日的に変更、不公正なインドネシア社会に対する批判は削除され、女性たちは、日本の手にかかった、すべてのインドネシア人苦悩の象徴として著している。1970年代の記憶と2000年の書き換えは、どちらの記憶が正しいということを表しているのではなく、1970年代2000年の記憶の違いは、記憶を残した時代や記録者の政治や思想を反映した結果であることを記している。最後の短い節では、東ティモールとオーストラリアの記憶により、構築された歴史について述べている。

第6章 Conclusion〔結論〕、

本博士学位請求論文で論じた広範囲の事例で詳らかにしたことは、第二次世界大戦時に作成された史資料の厳密な検証が、単に戦後70年の間に創られた「歴史物語」に、僅かばかりの詳細を付け加えることができるということではなく、むしろ、それは現代インドネシア史の転換を導き出すことができるということを書いた。そして、70年の間忘れ去られてきた、当時の社会的文脈という網目の中に、過去の出来事、当時生きた人々という糸を織り込むことでもあった。また、過去の主観的な再解釈の中に、再解釈の著者の思惟を読み解くことを可能にし、過去ではなく解釈者の時代や社会を理解することさえも可能にした。

インドネシア現代史の中で、今もなお漠然としている日本占領期インドネシアの歴史は、オランダ領東インドとインドネシア共和国を繋げる蝶番になり、歴史のつながりという視座を獲得する可能性を秘めた接合期と言える。このように、時間軸の中で曖昧な時期を、歴史の流れの中に積極的に取り込むことは、歴史の「客観性」を阻害するアプリオリやステレオタイプを排除する可能性さえ秘め、あらたな歴史を論考することが導き出される。